

『乍浦集詠』とその影響

——ある詩集の運命

春名 徹

はじめに

『乍浦集詠』十六卷三冊は、中国の浙江省平湖県に属する乍浦という土地で、同地の文人・沈筠（字は実甫、号は浪仙）が編纂した詩集である。

この詩集は、乍浦を題材として詠まれた詩を蒐集したもので、時代的にいえば明代から編集と同時代の清末に至る詩を対象としている。乍浦はもとより浙江の一港町であって、中央まで名の聞こえるような著名な詩人がいたわけではない。したがってこの詩集の占める位置も一地方出版物以上のもではなかった。現在、中国国内でも『乍浦集詠』を架蔵する図書館は多くないのである。

にもかかわらず、この詩集は刊行の直後に日本へ伝わり、幕府の学問所に収められるとともに、老中・若年寄などの要路の人々によって購入された。さらに一年を経ずして二種類の抄本が和刻され、幕末の知識人のあいだに一定の反響をもたらしたのであった。

これは乍浦が、近世日本、とりわけ正徳新令以降の長崎貿易において中国側の主要な出港地となったため、日本との

関係が密接であったこと、さらに同地はアヘン戦争の激戦地として知られていたもので、その惨状を伝える詩を多く含む詩集が、幕末知識人の危機意識に訴えるものがあつたためと理解できる。小稿は『乍浦集詠』の伝来の経過を追い、もっぱら日本に対してこの詩集がおよぼした影響についての考察を試みたものである。

一、『乍浦集詠』とその日本への伝来

『乍浦集詠』の舶載については、書誌学的な見地から、つとに大庭脩氏が注目しておられる。氏にしたがつてその輸入状況について述べれば、およそ次のとおりである。

まず刊行年月にかんして、大庭氏は道光丙午年四月刊とする。これは同書の扉に「乍浦集詠」の文字を書いた嘉興の人・方惟寅の記した日付に拠つたのであろう。これは道光二十六年すなわち西暦一八四六年の旧暦四月に相当する。ただし沈筠の自序は「道光二十六年閏端陽日」つまり同年閏五月五日付であるし、序のうちでもつとも日付の遅い海塩の人・朱昌頤には「道光丙午秋七月」とある。また張嘉鈺による跋文には「丙午冬沈君浪仙以乍浦集詠新刊」とある。つまり詩集自体の中でもつとも新しい紀年は道光二十六年冬（旧暦十一月）である。

ただし『乍浦集詠』は、日本側の唐船輸入書籍の目録である長崎会所の「書籍元帳」には弘化三年（一八四六）、つまりは刊行の当年の午四番船がまず二十四部を舶載したとある。入港時期は確定できないが同年冬の刊行ではいかにも遅すぎるように思える。刊行時期については一応、疑問を存しておく。刊行地は末尾の卷十六卷末に「乍川潘文秀齋刊」とあるので、乍浦であることが確認できる。

『乍浦集詠』は翌弘化四年八月の書籍元帳に載せられた。うち十部が新渡扱いになり、御文庫と昌平坂学問所へ各一部が収められた。ほかに五人の役人が購入した。老中の阿部伊勢守正弘と牧野備前守忠雄、若年寄の本多越中守忠徳、本庄安芸守道貫と酒井右京亮忠毗である。残りはすべて入札にまわされた。

また「嘉永二年酉歳五月の申三番船 同四番船 酉一番船書籍元帳」にも、酉一番船（一八四八年度）が一部を将来

したことが記載されている。

幕府に収められた二部は現に内閣文庫に保存されており、このうち学問所御用（請求番号三五八／四三）には「嘉永己酉」すなわち二年（一八四九）の受入印がある。いずれにしても、『乍浦集詠』は刊行の年一八四六年にただちに中国船によつて長崎にもたらされ、翌年「書籍元帳」に載せられて販売された。しかも同じ嘉永元年（一八四七）のうちに伊藤圭介の抄録した『乍川紀事詩』が刊行され、さらに翌嘉永二年（一八四八）には、小野湖山による『乍浦集詠鈔』の和刻本が刊行されている。つまり学問所に受入れられたのと同じ年である。

大庭氏は、全体として本書がこれほどまでに速やかに日本で受入れられたことに注目して次のように指摘している。「東亜の新しい世界史的な動きを伝える書籍が、出版後程なく持渡られ、まず幕府の要路にある大名の手に入るとともに、一般知識人にも和刻本としてひろくゆきわたった事實は、御役人様方調書の制度本来の目的に添うものであり、唐船持渡書の研究上特筆すべきものと思う」ただし、この論文が書かれた当時、大庭氏は伊藤圭介の『乍川紀事詩』の存在には気が付かなかつたのか言及がない。

一方、大庭氏は『乍浦集詠』がすみやかに舶載された事實を過大に評価することを戒めるためか、つぎのように補足しておられる。

「なお『乍浦集詠』の伝来については、別の角度からの意義を見ることができるといえる。それは先にのべたこの書が極めてローカルな出版物であつて、中国に伝本がないのに、日本にはその鈔刻すらあるという点である。出版されたその年に舶載された事實を、当時乍浦の人士がいかに憤り、また日本において時局に対する関心が高かつた故に、この本がかくも速やかにもたらされたのだというように意味づけるならば、それはいささか読みすぎ、三文政治家のアジ演説にすぎぬ。程澗南や沈敬膽が禁書を持つてきた時、『書肆に有り合せを積み込み』、内容を照合する暇もなく御当地へついでしまつたと述べている言葉を改めて吟味する必要がある。積出し港が出版地であつたためにす早く伝わつたのである。」

文中に名の上がつている程澗南とは明和八年（一七七二）卯九番船の船主で禁制の『天学初函』を持渡つたことを咎められた。沈敬膽も寛政十一年（一七九九）に持渡つた『帝京景物略』が禁に触れた。

大庭氏は、別の個所で地方志の輸入状況によって出帆地に近い地の刊行物がより多く輸入されていることを実証しているほどであるから、『乍浦集詠』の伝来が早かった理由として積出し港が出版地であったことを強調することは充分、理解できるが、ここでは強調がすぎて日本における反応の早かったことの意義が薄れてしまっている点に不満が残る。

それは『乍浦集詠』の性格にも関係する。大庭氏は「この地は阿片戦争の時イギリス軍の攻撃をうけ、雍正七年以来置かれていた杭州江寧滿兵両營は陥ち、乍浦水師副都統長喜、署乍浦海防同知韋逢申以下多数の守備兵が戦死し、七十の老女や十幾歳の少女が節を守って池水に自決するという戦禍の地となったのである。乍浦集詠はこの壬寅乍浦殉難の人々をいたみ嘆咭喇夷船の暴をいきどおる詩を集めたものである」といわれるのだが、この説明も厳密さを欠くものといわねばならない。

むしろ次のように考えるべきであろう。『乍浦集詠』は、この地を対象にした詩一般を集めた書で、必ずしも「壬寅乍浦殉難の人々をいたみ嘆咭喇夷船の暴をいきどおる詩」だけを集めたものではない。それは唐船出港地の出版物であったがゆえに速やかに舶載された。その後、この書は日本で注目され、抄録したものの和刻まで行われた。日本における二種類の抄録は、いずれも『乍浦集詠』のなかでは約一割を占めるにすぎぬ壬寅乍浦殉難の人々をいたみイギリスの蛮行をいきどおる詩を中心に選録したものであった。このような受容をさせたものは、ひとえに日本人のアヘン戦争への関心に他ならない、と。

さしあたってこの角度から『乍浦集詠』の実物とその受容に則して再検討することからはじめたい。

二、アヘン戦争と乍浦

乍浦は杭州湾の北岸に位置し、浙江省平湖県に属する海港であり、南の寧波と相對する位置にある。長江河口から浙江に至る海岸部は長江の運んだ土砂の堆積した平坦な浜が続いているが、この地域だけは海に迫って丘陵が隆起し、港湾に適した入江を形づくる。

江浙の沿岸地域の例にもれず、乍浦は明の嘉慶期には倭寇の侵攻を受けた。清朝に入ってからには軍事的にも重視され、清朝初期から正規軍である八旗の駐屯地に指定され、砲台が築かれ、狼煙による連絡網も組織されていた。

近世の日中貿易において、最初、中国側の商船は沿岸各地から長崎へ来航していたが、日本側の貿易制限政策を反映した正徳五年（一七一五）の海舶互市新例の施行以来、出帆地は次第に江浙、とりわけ乍浦へ固定するようになった。

乍浦は水路によって内陸への交通の接点ともなっており、この内水路は大運河と黄浦江をつうじて南は杭州、北は上海、蘇州、さらには中国北部へも繋がっている。孫文が『建国方略』のなかで上海に代わる民族的な経済自立のための「東方大港」としてこの地に期待したのも、この立地条件によるものである。現在、新たに埋立てを行って新港が建設中だが、ここでも内河水路を通じる後背地との交通に期待がかけられている。

なお長崎貿易の独占にもなつて、中国領に漂流し、あるいは異国漂流後、中国を経由した日本人漂流民は、乍浦へ送られ、そこから貿易船で送還されることとなる。したがって乍浦という土地は漂流民の帰国後の口述書のなかでも一定の位置を与えられることとなった。『長崎実録大成』第十二巻の「從唐国日本人送来部」では、寛保二壬戌年（一七四七）に五月廿日四番乍浦出の船が薩摩の者二十人を送つて来た事件が、乍浦からの漂流民送還の初見であり、以後幕末まで同地を経由した日本人漂流民の事例は十数件にのぼる。

ただし以上のような乍浦の地位は、日本では限られた長崎貿易の関係者のあいだの認識にとどまっていた。日本人に広く乍浦の名を印象づけたのはアヘン戦争（一八四〇～四二年）である。

軍事的にみるとアヘン戦争はおよそ三期に分けられる。最初、一八四〇年六月に香港に集結したイギリス軍は、林則徐の守る広東を攻撃することを避けて、直接、北京の朝廷に圧力をかけることを目標に定め、まず舟山島に上陸して定海を占領し、さらに白河河口まで艦隊を北上させて、交渉を強制した。これに応じた直隸総督・琦善は北京の朝廷と相談しながら、交渉の場を広東に移すことをイギリスに認めさせ、翌四一年はじめに川鼻で仮条約を結んだ。しかし強硬態度に転じた道光帝は仮条約を認めず、広東付近の軍備を増強したので、戦闘が再開され、五月に休戦協定が結ばれた。

戦争を機会に中国を徹底的に屈伏させる決意のイギリス政府にとってもこの状況は不満であり、八月、本国政府の訓

令にもとづき、イギリス軍は新たな北方への攻撃を再開し、八月には福建省の廈門を占領してさらに北上を続け、十月には、一時、撤兵していた舟山島の定海を再占領し、さらに対岸の浙江省鎮海と寧波を占領した。ここまでが第二期である。

しかし軍事力の不足を感じたイギリス軍はここで一旦、兵をおさめ、イギリス代表のポティンジャーは四二年一月末に南に引き揚げ、香港に司令部を置いた。

第三期の戦争は、イギリス軍が増強された一八四二年五月に始まる。中国政府との交渉の経験から、イギリス側は第一期とは目標を転じて、まず長江封鎖に主目的を注いだ。長江およびこれと交差する大運河を封鎖することによって北京を含む中国北部への食料の補給を絶つことが可能となる。これを政治圧力として利用するという考えである。

この軍事攻勢の最初の目標とされたのが乍浦であった。五月七日、寧波を出発したイギリス遠征軍は、十八日、乍浦を攻撃・占領する。さらに北上して長江に入り、六月十九日に上海、七月二十一日に鎮江を占領、長江および大運河の封鎖を完成した。この後、間もなく南京への攻撃が開始されると清朝は屈伏し、南京条約の締結によって戦争は終結する。

乍浦が最初にアヘン戦争に直面したのは、道光二十年六月二十四日（一八四〇年七月二十二日）である。この日、一隻のイギリス帆走軍艦が沖合に現れて砲撃を加え、十四人の負傷者が出た。第一期の定海占領（六月八日＝洋七月六日）の直後に当たる。しかしこのイギリス艦は夕方には退去した。

翌二十一年十二月十七日（一八三二年一月九日）、今度は数十の小型船を従えた二隻の汽走軍艦が乍浦沖に現れ、北寄りの燈光山付近に停泊したが、翌日は西北風が激しかったため一旦、退き、翌十九日、また菜薺門（沖合の大孟島と菜薺島との間にある水道）に近づいて発砲した。付近の住民は恐慌状態に陥り、乍浦城内に避難する者が多かった。しかしこの時も、イギリス軍はそのまま去り、何事も起きなかった。第二期の戦闘の終了間際のことであり、寧波を占領したイギリス軍がさらに北上を試みていたのかもしれない¹¹⁾。

三、乍浦と壬寅擾乱

要するにアヘン戦争開始以来二年間にわたって、乍浦は、これまで、敵影をみ、多少の砲撃を受けたとはいえ、直接には、ほとんど戦争の影響を受けずに日を過ごして来たのである。それが長江封鎖戦の開始によって突然、道光二十二年四月九日（一八四二年五月十八日）にイギリス軍侵攻に直面した。『乍浦集詠』の詩人たちが「壬寅擾乱」とよぶ事変である。

この日、乍浦の沖合に二十四隻からなるイギリスの艦隊が突然、現れた。本国、インドから補給を受けたイギリス艦隊は長江封鎖のために北上を開始するにあたって、まず乍浦の占領を目指したのである。

中国側もイギリスの侵攻は予想する所として海岸線の砲台の防衛を強化していた。またこれに先立って中国側でも攻勢に出る計画があり、乍浦には陝西・甘肅の陸兵が増強されていた。鎮海水師副都統の長喜が海岸の防衛施設である胡蘆城を守備し、佐領の隆福が率いる分遣隊が観山湾の天尊廟にいた。

乍浦鎮は海岸から半キロメートルほど内陸に、ほぼ正方形の城壁を構えている。だが城自体にはほとんど防衛上の増強はなされず、もっぱら海岸で敵を防ぐ構えであった。城鎮の南から東にかけて海に面した丘陵地帯が入り組んだ湾状をなしている。ここに数箇所にわたって堡壘を設けて大砲が装備してあった。攻撃軍にしてみれば、正面からの攻撃には、当然ながら大きな抵抗が予想されるので、イギリス軍の主力は海岸の防衛線を迂回し、東寄りの山越しに乍浦城に迫ろうとした。この主力は丘陵の裾に位置する天尊廟の守備隊の銃火に迎えられたが、激しい銃撃戦の末、二百余の守備隊は全滅し、イギリス軍は廟を占領した。胡蘆城の防衛軍も善戦したが、指揮官の長喜は重傷を負い（三日後に陣没）、残りの兵は乍浦鎮に撤退した。ここでも激しい市街戦が交えられたが、火力にまさるイギリス軍に圧倒され、乍浦は占領された。たった一日の戦闘によって乍浦は劇的な戦禍を被ったのである。

戦闘にかんしては、イギリス側の記録する所もこれと一致している。乍浦鎮正面の海岸は防衛されていたので陸兵が

東側に迂回して上陸した。この戦術は成功したが、予想しなかった山と山とのあいだの平地の廟（つまり中国側のいう天尊廟）に拠る中国兵からは頑強な抵抗を受けた。この建物は石造りの塀をめぐらし、唯一の入口は正面の門であったので、防衛側の銃火をくぐって攻撃することに難渋した。結局、ロケットと砲火によって建物に火を放ち、攻略することができた。他の場所では問題となるほどの抵抗は演じられなかったという。イギリス側の記録によれば、戦死九、負傷五十五、そしてイギリス軍が埋葬した中国人の数は千二百乃至千五百に達した⁽¹²⁾。

イギリス軍にとっては、乍浦攻略は八旗軍と遭遇した最初の戦闘であった。これまで各地で大きな抵抗は経験して来なかったもので、彼らは八旗正規軍の頑強さを印象づけられるとともに、満州兵が敗戦後に自殺することに強い衝撃を受けた。乍浦城内では、軍人だけではなく家族の自殺者の死体も認められた。先にのべたイギリス側の埋葬した中国側死者の数のなかには、当然、この人数も含まれている。

イギリス側は戦闘終了後の略奪や暴行については口を噤んでいるが、中国側は多くの蛮行があったと主張する。また中国側の記述では漢奸が内応して城に火を放ったとしている。いずれにしても乍浦はアヘン戦争中の最大級の激戦の地となったのであった。そして歴史的事実がどのようなものであったにもせよ、中国人にとっては殉難者によって強く記憶される結果となったのである。

四、『乍浦集詠』とその性格

地方色を求めた詩をあつめて詩集を編集することは本来、中国における詩の伝統の一部である。唐の詩人・劉禹錫が任地の風俗を歌った楽府を由来とし、転じて一地方の風俗・景観をうたった詩にたいして竹枝詩というジャンルが与えられるようになった。また地方志にもその土地にかかわる文人について記述し、作品を載せる習慣がある。

乍浦には清初に李確（字は潜夫、号は蜃園・一五九一〜一六七二）という文人がいて、詩集の他、康熙四年（一六六五）に『乍浦九山補志』十一巻という山水志を出している。彼は乍浦における文人の祖という位置を占めており、後々まで尊

敬される存在となった。

その後には名のある文人として、『乍浦志』六巻首一卷末一卷（乾隆二十二年刊）『乍浦志統纂』（乾隆五十七年刊）を編んだ宋景閔、『乍浦続志』六巻（道光二十三年刊）の編集者・許河、『乍浦備志』三十六巻首一卷（道光八年刊）の鄒璟らを挙げる事ができる。他に乍浦にかんする竹枝詩としては管見の範囲で鄒璟『乍浦竹枝詞』（道光七年序）、盧奕春『乍浦紀事詩』（道光十二年成）などがある。『乍浦集詠』はこのような伝統をふまえた編纂物であることは明らかである。

『乍浦竹枝詞』の著者・鄒璟は『乍浦備志』（道光八年刊）の編者であることから判るように道光期の乍浦を代表する文人であった。また盧奕春の『乍浦紀事詩』には、『乍浦集詠』の編者沈筠の題辞や「集詠」に名のみえる黄金台による序が付けられている。つまり彼らは道光時代の文人として共通の交友圏にいたのである。¹³

とはいっても乍浦は文学的にとりたててみるべき土地とはいえない。李潜夫や宋景閔の遺風をしの人だり、文人同士の交流を詠んだ詩、さらには詩の題材として定石ともいえる乍浦をめぐる山々、海と島、漁村風景、伝説にまつわる古跡あるいは八旗駐屯地としての兵士の訓練の様などを詠んだ詩が多い。

参考までに伝統的な「乍浦八景」をあげておく（『乍浦備志』巻三十六 三十葉表裏）。瑞祥暁鐘、梁莊古泊、唐湾漁市、苦竹巖林、雅山仙洞、孟姜搗石、陳山龍湫、平山演武。要するに仏寺に鐘声あり、付近に古蹟あり、海は漁業でにぎわい、山に森林、溪谷の美や伝説の跡をとどめる。八旗の訓練もまた一景物であった。

全十六巻には個人別に合計五百七十三人の詩が収められている。巻一が明人十二人、巻二以降は日本人四人を別とすればすべて清人である。

このうち巻一から巻十四まではほぼ時代順に詩人を配し、十五巻は閨秀（女流）、十六巻は上が釈氏（僧侶）、中が羽士（道士）、下が外域という分類をしている。外域に載る四名はいずれも日本人であり、長崎との交流をうかがわせる。各巻の編成についての原則は明示されていないが、およそ時代順に配列されているもののようなものである。全巻をつうじてまず詩人の名、号、本貫地の順に記し、つぎに詩を掲げる。巻頭を例にとると「錢薇懋垣 海塩」とする。懋垣が号、海塩は地名である。詩人たちの本貫地はほぼ乍浦周辺の浙江の地で、文人の交友圏を示している。巻一の明人は、多く

は乍浦の文人の大宗・李潜夫の周辺の詩人たちである。

卷二、三には時代を確定できるような材料は含まれていない。清朝前期か。

卷四は『乍浦志』を編んだ宋景閔(号は話桑)周辺の人々、たとえば「宋話桑から詩集ならびに乍浦志を贈られて賦して謝す」などという題をもつ詩が収められている。『乍浦志』の刊行年からみて乾隆末年ということになる。この卷には「甲辰正月六日」「甲戌」と記した詩があり、それぞれ乾隆四十九年(一七八四)、嘉慶十九年(一八一四)にあたるのではないかと思う。もっとも後者は一順くりあげて乾隆十九年(一七五四)の可能性もなくはない。

前後の関係からすると卷五はおよそ嘉慶期で、戊寅(一八一八か)、癸亥(嘉慶八年||一八〇三)の干支を記した詩がある。また少なくとも嘉慶壬戌(七年||一八〇二)以降に書かれた詩も一首含まれる。

詩の内容についても、ここまではほとんど社会性を帯びた作品は見当たらない。卷六の道光初年の詩になってはじめて、時代の変化を暗示するような作品が現れる。すなわち、「壬辰仲冬、イギリス夷の船がひそかに海上に來たり、軍が警戒措置をとったことについての感想」として詠まれた徐熊飛という人の古詩である。壬辰は道光二年(一八三二)にあたるから、ここにあげたイギリス船とは、東インド会社が沿岸貿易の状況を偵察するために派遣したロード・アマースト号をさすのであろう。

卷七以下、卷十三まではほぼ編者沈筠と同時代の文人の作品を収める。なかには編者との交流を示す詩も少なくない。詩題の傾向などから、これらの詩人たちは、いくつかの所属グループごとに分類されているのではないかと思われるのだが、明示された原則はない。

要するに全体としてみるならば、『乍浦集詠』は乍浦にかんして詠まれたことだけを唯一の原則として、雑多な詩を集めたものということができよう。しかも沈筠は例言において、すでにまとまって刊行されたことのある詩集はあえて対象外としたことを明言している。したがって代表的文人である李潜夫や宋話桑の詩は一首も収められていない。むしろこれまで公刊されることのなかった、どちらかといえば無名詩人の作品を集めることに編者の意図があったのかもしれない。

れない。

さらに沈筠は時勢に敏感な型の文人であったことも言っておく必要がある。彼はかつて海防策を建言したことがあった(卷十四 二葉表の于源の詩の注)。またアヘン戦争中には海防同知の幕僚に加わって現実政治にもかかわっている。さらに一八四二年の戦禍の後、『乍浦殉難録』などをまとめたことも知られる。このような立場からいえば、『乍浦集詠』中にアヘン戦争にかかわる詩が登場することも当然の結果ともいえた。

巻頭の題詞にいう。

前明海上寇氣日熾 人鬼為レ鄰游屐罕レ至 国朝設レ鎮尚レ武崇レ文 講舍造レ士戈船習レ軍 安流魚肥繁柯花豔
歌二詠太平一 一時壇坫 妖鱷為レ患壬寅夏初 文弔二戰場一 詞感二園蕪一 事足レ徵レ実幽頼以闡 心賞手鈔積久成レ
卷 決擇既審蔵二諸名山一 志乘儲材以備二采刪一

ここでも乍浦が明代に倭寇を経験し、太平の代を経て壬寅の年に惨禍を被った土地であることを充分意識して、惨禍を弔って将来に備えようとする。『乍浦集詠』は、そのような歴史意識に支えられた上で編まれた詞華集なのであった。

五、伊藤圭介と『乍川紀事詩』

伊藤圭介(一八〇三—一九〇二)の『乍川紀事詩』は、嘉永元年(一八四七)に名古屋で刊行された。序文(原漢文)にいう。――

「自分は今春、たまたま宿痾で病臥中に道光丙午新刻の『乍浦集詠』を得た。この書は同地の人沈筠実甫の編むところで、壬寅の海寇(すなわち一八四二年のイギリス軍の侵略)にかんする紀事詩を多く載せている。心のおもむくままにこの詩を吟じ、鈔録するうちに、この小冊子をなすに至った。

最近、来航する中国商人やオランダ人の言を伝聞するところでは、イギリスの兵が広東その他の臨海地方を侵略したさい、火炮は天を駆け、船は火輪船を用いたので、清兵は力をつくして防戦したのではあったが敗北がうち重なり、侵

略されること日をおつて深まり、イギリス軍は命令一下、たちまち北京を直撃し得る勢いを示すに至ったのであった。中国はここに至つて遂にイギリス軍を阻止し得ぬことを悟り、あわただしく幾千万の賠償金を納めた上、舟山列島を与えて和を結び、辛くも首都占領を免れることを得た。屈辱これにすぎるものはない。

ああ思うに中国人の気質は自尊が甚しく、外国を蔑視して虫が蠢くかのようにみなしていたため西欧の実情を知ることができず、その兵の精強、武器の發達が昔日の比ではないことを悟らなかつた。ために一旦、武器をとつた結果は、意外な結末となつたことは怪しむに足りない……」

彼の意図が中国に事寄せて暗に日本の現実を諷していることは疑う余地がない。伊藤はすでに博物学者として名をなし、尾張藩においても重要な地位にあつたが、対外的関心も強かつた。従来、それは彼の高野長英や渡辺崋山との交友関係から説明されているが、私は彼の学問である本草学・博物学そのものがグローバルな関心を前提としている以上、必然の結果であるというふう¹⁴に考えている。それはともかく、彼の『乍浦集詠』への関心がアヘン戦争関心であることは『乍川紀事詩』の編集に明確に現れている。

すなわち伊藤圭介は、この書の巻頭に、原著にはない浙江の地図一葉と乍浦海岸の防衛配置にかんする記事を掲げている。上下二巻、上は二十葉、下は二十一葉という小冊ではあるが、沈筠の序詩を別として上巻二十四人二十七首、下巻四十六人五十五首を収める。これは量にして『乍浦集詠』のうち一割強を占めるが、ほぼ全編がアヘン戦争にかかわる詩であり、原著のアヘン戦争詩の九割強を網羅するといつてよい。

原詩集の体裁は無視して、伊藤は事件の経過を追つて内容別に詩を配列しなおした。『乍浦集詠』におけるアヘン戦争関係詩を紹介する意味もあるので、比較的詳細にのべることにする。

上巻の最初に沈筠の題詞を置き、つぎに形どおり乍浦の美しい風光を詠いあげる詩を数首置く。一例をあげておく。

乍浦

鄭珩遜

孤城如レ甕海雲遮 形勝東藩此競誇 一浦通レ潮停二畫鷁一 九峯環レ郭走二長蛇一 江南岸接金山衛 日本濤沈鉄板沙 西去二塩官一二十里 天寧寺塔絢流霞 (『乍浦集詠』の巻八 十一葉裏に該当。以下同様に表示する)

北に江蘇省上海県の金山衛、東に日本、西に塩官。天寧寺塔に霞がたちこめるといふ景色のうちにも海浜の地の意識がうかがえる。なお乍浦の海岸に面した浜の砂は固く、鉄板沙とよばれたという。

さらに「乍川秋汎」(顧其銘/卷三 七葉表)という詩は咲き乱れる萩の花が川にこぼれ、太平の戍兵が釣り糸を垂れるという情景を描く。八旗の駐屯地である乍浦とはいへ、兵はここではまだ一つの景物にすぎない。

つぎによく「壬辰仲冬英吉利夷船潜来海上軍士戒嚴有感」といふ徐熊飛の詩(卷六二葉表)を載せる。壬辰は道光十二年(一八三二)。この年、東インド会社の意を受けたイギリス船ロード・アマースト号が厦門、福州、寧波、上海などに接近し、地方官憲に貿易を要求して波乱をまきおこした。同船の航海は夏のことであったが、その余波が冬十一月になって乍浦にも及んだということであろうか。

詩にいう――。

咫尺黄盤鳶 何来万里船 鍼程浮二积水 瘴嶺隔二蛮天 浪説通商地 難レ憑入貢年 帆檣無二定所 飄忽遂二雲煙

星分天竺国 地界大西洋 人与二魚龍 狎 舟随二鶩鶴 一翔 航琛經二絶徼 一重訳歴二炎荒 一 閩粵兵烽急 休レ令レ突二海疆

イギリス何するものぞという気概の詩とみるべきであろう。しかしロード・アマースト号事件はイギリスの中国市場開放の意欲の激しさを反映するもので、その意味でアヘン戦争を予告していた。かつて私はその反響が日本にも及んで田能村竹田の筆記に跡をとどめていることを指適したので、ここで詩人が情勢に反応していることにはいささかの感慨がある。

ついでアヘン戦争時期に入る。一八四〇年すなわち開戦の年の六月の詩が二首、イギリス艦がはじめて乍浦近海に偵察に現れ警報が発せられた際のものである。いずれも乍浦以外の近くの土地に住む友人が、沈浪仙(実甫)の上を思いやった詩である。一種の挨拶の詩ではあるが、平時から海防に熱心な沈が危機にあたってどのような心情を抱いているであろうかと思ひやる内容であつて、期せずして知人たちから見た沈筠の性格を示しているともいえよう。

つぎに翌辛丑（一八四二）の詩を置く。つまりは警戒のはりつめた気分のうちでありながら現実には何も起こらない不安定な時期である。それは急転して「壬寅四月初九日」（一八四二年五月十五日）のイギリス軍侵攻当日の諸事件の詩に至る。

ほとんど一瞬にして勝敗が決してしまつた以上、この部分の詩は必ずしも多いとはいえない。激戦が行われた唐家湾の戦いについて黄金台の「唐湾戦」（以下楽府紀壬寅四月乍浦之難という副題がある）は次のようにのべている。

塘下集_二楼槽_一 塘上樹_二旗鼓_一 唐家湾口_二偪_二強虜_一 官軍有_レ礮不_二敢發_一 官軍有_レ刀不_二敢拔_一 関西一軍踊躍起 大呼格闘東山嘴 不_レ許長鯨悼_二其尾_一 齊軍坐視秦軍孤 四百余人陷_レ陣死 日射_二寒涛_一 血凝_レ紫 吁嗟乎健児尽如_二関西軍_一 島間鮫鱷_二應殲_レ群（卷十 一葉表）

礮は砲である。唐家湾を守っていた陝西の兵は善戦したが、孤立して援軍がないまま全滅した。関西軍とは、これを指している。

戦いに敗れた乍浦の惨状については李善蘭の詩「書乍浦壬寅四月事」がある（卷十四 三葉裏）。

千家万家門乱開 街頭義勇殺_二漢奸_一 漢奸出沒不_レ可_レ蹤 割_二民首級_一 以報_レ功 東家有_レ児暮不_レ歸 屍横_二門前_一 血滿_レ衣 西家有_レ弟朝纔出 覓_レ之身存頭已失 通衢蕩蕩人畏_レ行 白日城市走_二山精_一 旁觀不_レ忍怒氣勃大呼突出甘肅卒 腥血模糊義勇頭 為_二爾良民_一 一雪_レ讐

この後、死者にたいする追悼の詩、あるいは敗戦の悲哀を綴つた詩で上巻は終わる。

下巻はまず、殉難した婦女を哀悼する詩を多く集める。これらの婦人たちについて、沈筠にはべつに「壬寅殉難録」の著があつたというが今は伝わらない。詩の題材としては「劉烈女」と呼ばれる人にかんするものが多い。名は鳳姑、父の名は進、したがって詩では「劉進女」ともされる。父はすでに無く、母とともに機織りをして過ごしていた。乍浦城陥落のさい十九歳。イギリス兵に犯されようとしてこれを拒み、刃にかかつて殺された。

ここでは日本人「山亥吉 号梅村」の詩を掲げる。おそらく長崎在住の人で、乍浦から渡航した中国人から事情を聞いて詠んだものであろう。その詩が乍浦に伝わり、事件後四年目の『乍浦集詠』に収められたわけである。乍浦と長崎

の密接な交渉を物語る。なお「集詠」にはもう一つ日本人「劉吉甫 穆堂」（唐通事か）の劉烈女詩をのせるが、『乍川紀事詩』には選ばれていない。

乍浦劉烈女

自甘^二一死^一節^二弥堅^一 肯墮^二夷人^一辱^二祖先^一 乍地驚騷遇^二今日^一 竇家義烈憶^二当年^一 蘭心縱被^二風霜虐^一 玉質寧
同^二瓦石全^一 遺事遠伝東海外 此心誰復不^二悽然^一（卷十六下 一葉表）

ほかに井戸に身を投じた劉心葭の娘、七十三歳で死んだ劉若金の妻顧氏、池に身をなげた十三歳の胡咸慶の娘などを弔う詩がならぶ。

この後、乱後の乍浦の廢墟を詠ずる詩などが続き、文人たちが沈筠の『壬寅紀事詩』に寄せた詩なども見える。ついで乍浦の復興がはじまり新たな砲台が築かれるさまでしめくくられる。抄録されたものは元の詩集のうち一割弱の量を収めるにすぎないが、全体としてはアヘン戦争にかんする主題だけを選択した極めて限定的な目的をもつことは改めて確認できよう。刊記に「尾張 伊藤錦窠鈔 花繞書屋蔵版」とある。錦窠は圭介の号、花繞書屋はその書齋号である。

六、小野湖山と『乍浦集詠鈔』

小野湖山（一八一四～一九一〇）の『乍浦集詠鈔』は、『乍川紀事詩』にやや遅れて嘉永二年（一八四八）に「横山巻」の名で刊行された。横山は彼の本姓である。初刻本には「遊焉吟社蔵板」とある。遊焉吟社はおそらくは湖山を中心とする吟社である。翌嘉永三年四月には、浅草福井町一丁目五郎兵衛店の書物矢清七が引受け売り弘め方を願い出、七月に町奉行所から許可された¹⁶。江戸で市販された出版状況からみて尾張で出された伊藤圭介の著よりは影響が大きかったものと思われる。

湖山は幕末から明治にかけて著名な漢詩人である。近江の郷土の家に生まれたが、江戸に上って梁川星巖の門に入り、頭角を顕した。時勢に敏感な慷慨家であったという。後に豊橋の大河内家に招かれて藩政に参与した。後年、明治三詩

人と称された。

『乍浦集詠鈔』の序文で、彼は、詩と史とは本来、同じものだという。僅々数首の詩によって、よく一代の治乱興廢の跡を表現することができるといふ。しかも史は時に表現を避けねばならぬ事があるのに反して、詩は多く感激悲憤の感情を表出するものであるから罪を問われることがない。……したがってその隠れたものを明らかにする力は往々にして史に勝る。——このように詩の力を宣揚したのは詩人としての抱負ともとれる。また読み様によつては、本書はもともと詩の形を借りた史のメッセージなのだといつてゐるようにもとれる。ともかくそれに続けて湖山はいう。——

「自分は清人沈筠編む所の『乍浦集詠』を読む機会を得た。この詩集は乍浦という地の山川の勝、風土の美を明らかにしているのみならず、壬寅の洋夷の擾乱について縷々として陳べていささかも避ける所がない。作者の感激や悲憤の情もまた明らかである」。そこで余暇に抄出して一編を得た。「乍浦という区区たる地にはすぎないが、中国沿海万里の〔海防の〕こと、満清全国の政治のこと全般にわたつて推測し、あらましの観念を得るに足る」。ここで湖山は、詩は時に史に勝るといふ持論を再確認して序文を結んでゐる。

伊藤圭介の場合のようにあからさまに自国の政策を批判する言葉はないが、『乍浦集詠』のなかから「歴史」を、とすることはつまりは現実の政治を読みとろうという意図は明瞭である。結局、それは伊藤圭介同様にアヘン戦争との関係でこの詩集を読もうということに他ならない。それは巻末に付録として舟山の戦いを対象とした無名氏の一連の詩などを加えたことで明らかである。

四卷二冊、本文は一、二巻が各八葉、三巻が十三葉、四巻は付録で八葉という構成である。『乍浦集詠』からの抄録の仕方は、原詩集から巻をおつて抜粋する体裁となつており、『乍川紀事詩』のように主題による分類ではない。ただし原著の巻一から巻五までは一首もとらず、まず沈筠の序詩を置いた後、いきなり巻六の徐熊飛「壬辰仲冬、英吉利夷船潜来海上、軍士戒嚴有感二首」を掲げ、以下巻六から他に一人、巻七から三人、巻八から五人、巻九から五人、巻十から六人、巻十一から五人、巻十二から十人、巻十三から十人、巻十四から八人、巻十五（閩秀）から二人、巻十六上（釈氏）から一人、巻十六中（羽氏）から一人、巻十六下（外域）から二人、計六十人を選んでゐる。一人数首を収める場合

もあるので、全体の量は『乍川紀事詩』よりもやや多い、ほぼアヘン戦争関係詩の全部を収めるといってよいだろう。湖山が時に「日本」という文字を欠字にしたりする配慮は、江戸という幕府の膝下における用心といえようか。

七、『乍浦集詠』のその他の反響

これらの二種の抄録が、直接にどのような反響を与えたかを明らかにすべき材料は見当たらない。ただしこの時期の出版物で『乍浦集詠』を参考書として挙げた書籍が数種、認められる。

(一) 『海外新話』と読本におけるアヘン戦争

まず最初に注目すべきは嶺田楓江(一八一八―八三三)の『海外新話』五卷五冊である。嶺田は丹後田辺藩士、名は雋、字は士徳、楓江はその号で、田辺藩の江戸屋敷が日本橋紅葉川にあったことにちなんでいる。彼は経史を佐藤一斎に、蘭学を箕作阮甫に、詩文を梁川星巖に学び、小野湖山とも交友があった。アヘン戦争に感ずる所があり、『海外新話』五卷(嘉永二年)を著した。主として『夷匪犯疆録』に依拠して、清国におけるアヘン厳禁論の台頭と林則徐によるアヘン没収の事を発端とし、アヘン戦争の開戦と戦闘の経過から中国の敗戦と南京条約の締結に至るまでを叙したものである。材料とした『夷匪犯疆録』は、氏名不詳の中国人が戦争にかんする公式の記録(地方官からの皇帝あての上奏文〔報告書〕や皇帝の上諭)を集めたもので写本の形で日本へ伝来したらしい。その時期は嘉永元年を下らない¹⁷⁾。日本では反響が著しく、のち安政四年(一八五七)には高鍋藩の明倫堂から木活字による刻本も出た¹⁸⁾。

嶺田は「童蒙ノ士トイヘトモ、一読シテ記誦シ易カラシメンカ為」に、全文を振り仮名つきの仮名まじり文で記し、原記録を読み物形式にくだいた表現に改め、挿絵を入れ、源平盛衰記や太平記のような軍談の体裁をとった。さらに『夷匪犯疆録』は、突然に一八四〇年にイギリス軍が舟山の定海県を侵す所から始まっているので、アヘン戦争の由来から舟山侵攻に至る経過などを補うため参考として『経世文編』『隱憂録』『乍浦集詠』『清武記』『聖武記か』などの諸書に

扱ったと例言に記している。

『海外新話』は「天賜前鑑非無意……嗚呼海國要務在知彼」（序文）と、アヘン戦争における中国の敗北を日本の教訓と捉えることによつて、伊藤圭介や小野湖山と同じ意識に立つものである。明治以後、千葉県で初等教育に貢献したという後年の経験からも判るように嶺田には啓蒙主義的資質があつたため、アヘン戦争の危機の意識を表現するにあつて、むしろ通俗的な文体を選ばせることとなつた。『海外新話』はまずイギリスの国情一般についての記述を巻頭に置き、黄爵滋のアヘン嚴禁の上奏文から説き起こして最後は南京条約の中国正文をそのまま掲載するなど、真面目な啓蒙書であるが、みずから記すとおり、意識的に軍談調を採用している部分が少なくない。

このうち『乍浦集詠』の知識に扱っていることが明らかであるのは、巻四の「乍浦落城付夷人乱妨事」と「烈女劉氏事」の二章、とくに後者である。乍浦の戦闘を叙述するにあつても「集詠」の知識を利用してゐるが、満州兵（八旗のことであろう）を率いた副将が伏兵をもつてイギリス軍を悩まし、百人余を討取つたり、乍浦城内の最後の決戦で水師副都統長喜、同知章韋逢及び張恵・周恭寿の諸士が残つた士卒を率いて馬に跨がつて敵中に駆け入り、散々に相手を打破つたり、史実を逸脱した潤色が認められる。

「烈女劉氏事」の章も、相当に脚色がある。劉女の殉難についてはもとより『夷匪犯疆録』には記述がないので、もつぱら『乍浦集詠』に扱つたのであろう。今、『海外新話』の体裁を知るために一部を引いてみる。

「烈女名ハ七姑、平湖県学廩生劉心葭といへる者の女なり。乍浦城内に居住す。性質聡慧温和にして容色また美艶なり。年幼より好このんで書を読ミ頗る人倫五常の道を悟り裁縫の業人に勝れ傍に又算法を学得能家政を助けり。四月九日乍浦城陥るの日、家々の婦女乱を避んとする途中に於て往々夷人の為に捕獲姦淫せられ其汚辱を請る者数を知らず……遙に七姑の姿を見てこれをつんと数人の黒夷……七姑を目懸て追来る。其時七姑ハ急ぎ己が家に走て早くも井中に身を投ぜり……父母ハ……今ハ女七姑のことを深く案じ……己が家に還り彼方此方と女の所在を尋るに及び偶井中を窺バ雪の膚微く露れ紅の衣袖湿ひて太液の芙蓉雨を案ずるの如く僅十有九の齡を保ち未だ字あざなせざるに節義を守て死したりし……豈古今無雙の烈女ならずや」

たとえば顧佩芳の「乍浦劉烈女」。「劉家閨媛似蘭芳」羞見春風桃李行 素質明詩復明禮 冰心如月亦如霜 小姑独处溪澄鏡 阿母憐儂竹打箱 動地巖城聞鼓角 連天大海駛舟航 紅夷突起軍民匿 烏合紛乘里社荒 潛跡比隣藏樹翳 捐骸深井託波涼 蟬嘶城上悲齊女 騷逝門前別陸郎 第一銀瓶追古烈 無雙白壁亘余光 巴清巖峯秦台聳 羅鳳崔巍漢闕長 願弔幽貞一伝樂府 絲桐余韻播悠揚」(乍浦集詠鈔 卷三 十葉裏十一葉表) という詩などを素材にしているのであるが、かなり自由に読みかえて語っていることを見ることができる。

嶺田の態度は、日本人の『乍浦集詠』の受容の仕方一般に示唆を与えるものである。アヘン戦争がもたらした危機の本質は、必要とあれば戦争という暴力を行使してもアジア市場の解放を行うのだというヨーロッパ資本主義の決意である。ただしそれは、現代の解釈ないしは後知恵であって、当時のアジア人にとって充分に構造的に把握されていたわけではない。せいぜいのところヨーロッパ人の企図の想像もできない悪辣さを説き、武器の優秀さに警戒し、行動の残虐さに憤慨するというところによってしか、この危機感は表現できなかったのである。その意味では『乍浦集詠』の諸詩がもっていた殉難者の追悼詩という形式は、うってつけの素材であったに違いない。

したがって嶺田のこのような表現は感覚的であるだけにかえて日本人の情緒を刺激する効果はあったのではなかったか。それは通俗的であった分だけ要路を刺激したように見える。本書は無届け出版を理由に処罰され、版は没収、嶺田は三都所払いの処分に付された。しかしこの出版はアヘン戦争や太平天国にかんする通俗読み物の出版を刺激し、多くの類書を生んだのであった¹⁹。

嘉永己酉(二年)の序をもつ烏有生(種菜翁)の『海外新話拾遺』五卷五冊は、『海外新話』に追隨した作品の端緒をなすものである。題名や体裁が『海外新話』に似せてあり、刊行時期も近いので嶺田楓江自身の執筆とする書も少なくないが、原本を検すれば、「楓江嶺田氏著ストコロノ海外新話紀載ノ事件全ク夷匪犯疆録侵犯事略等ノ書ニ就テコレヲ採択次編ストイエトモ大小ノ事件遺脱ナキニ非ス因テ其脱スルモノヲ収シテ此編ヲ著ス」(例言)と称しており、別人の著書であることは明らかである。本書は『海外新話』に追隨した作品であるから本編以上に生の材料へのよりかかり

がはなはだしい。したがって『乍浦集詠』からの引用もまた顕著である。まず巻頭に清人陳鶴亭の詩四首を掲げて眉言に代える。これは『乍浦集詠』巻十二に収める詩である。

また巻四で乍浦について述べるが、落城については『海外新話』にゆずり、「乍浦海岸築台場」「夷匪乱妨事」「烈女劉鳳姑事」と名づけた章を設ける。「乍浦海岸築台場」ではイギリス侵攻に先立つ準備をのべた後で、最後に曹福欽という人の詩を引用する。「瞥見紅旗試一揮 礮声動地凜軍威 天地震蕩妖氛掃 百万蛟龍挾浪飛」。これも『乍浦集詠』巻十二に収める「葫蘆城観演礮」という題の詩である。

乍浦の殉難婦女のなかではすでにみたように、詩の材料としては劉鳳姑がもつとも多くとりあげられているが、『海外新話』本編ではあえてこれを避けた。「補遺」では当然のように『乍浦集詠』の諸詩に拠って、この烈女を顕彰する。他方、「夷匪乱妨事」の章となると、乍浦における残虐行為について、もはや扱ふべき史実が不足しているために、イギリス兵が中国人の墓を暴いて副葬品を奪ったというような誇張した物語を作りあげるに至った。ここにアヘン戦争談話が次第に歴史から物語へと変質して行く過程をも認めることができよう。

ただし、のちの太平天国にかんする物語が多くは興味本位に墮したのに反して、アヘン戦争関係の物語の基調には、中国にたいする同情とイギリスの暴虐にかんする憤りの感情が底流として抜きがたく存在する事実は、当時の民衆のアヘン戦争観を物語るものとして無視し得ないところである。

(二) 『東航紀聞』の場合

『乍浦集詠』を利用したもう一つの例は、紀伊藩の学者、岩崎俊章が編纂した漂流民の記録『東航紀聞』十巻にみられる。『東航紀聞』は、南アメリカに漂流した兵庫の船栄寿丸の乗組員のうち同藩出身の二人の漂流民・善助と弥市が帰国後、その見聞を聴取し、考証を加えた著作であって、いわゆる編纂物漂流記の系統に属する。栄寿丸は天保十二年(二八四二)に漂流し、太平洋上でスペイン船に救助され、メキシコに逗留したのち、乗組員の一部がルソンからマカオを経由して中国に着き、最終的には乍浦から長崎貿易船で帰国した。長崎帰着は善助が天保十四年(一八四三)、弥市が

弘化二年（一八四五）である。²⁰この漂流は日本人にとっては未知のメキシコでの経験が注目を集めたが、同時に、アヘン戦争直後に、中国を通過し、とくに激戦地の乍浦の状況に接していたことが、紀伊藩要路の関心をひいたのであった。岩瀬は『東航紀聞』を編むにあたって参考とした六十一種の書物をあげているが、博物学や地理学、暦学、など多様な書名の他にアヘン戦争関係では『乍浦集詠鈔』と『海外新話』が含まれる。ここで使われたのは原本ではなく「集詠鈔」であるが、『海国図志』や『聖武記』同様に翻刻によってより広く普及する過程を示しているように思われる。

ただし『東航紀聞』は全十巻のうち最初の六巻のみしか伝存せず、目録上では乍浦記事を含む巻十「唐山紀事 附啞喲話」の部分は散逸してしまった。したがって、この部分でどの程度に『乍浦集詠鈔』を利用したかは残念ながら明らかでない。ただし巻二の漂流記事、とくに善助の証言のなかには、乍浦にかんする記述が相当に含まれており、その審問にあたって岩崎俊章らの側から『乍浦集詠鈔』の内容が利用されたことを見てとることができる。

善助は香港からイギリス人の手によって舟山に送られ、そこから中国側役人に渡されて寧波、乍浦を経由して帰国した。したがって現実に戦禍の跡をとどめる中国の街を見聞する機会があった。ただし彼は、それを「痛ましい」と感じているが、それ以上の感想はもらしていない。

「暎夷の唐土を乱略せしは壬寅（天保十三）の年にて、舟山最甚し。土商の論なくすへて大戸は焚倒せられて、たたら垣のみとなり、寺観の仏像は地上に横はれり。当時修理にかかれるものもありしか、凋傷甚しくしてはかくしからず。乱後のさま異域なからも見るに忍びざりし」

そして乍浦では、「乍浦の暎夷に暴乱せられしは、昨年壬寅四月の事にて、殺代に遭へるもの多かりしといふ。その神廟、寺院焚頽せしもの多く、市街の大戸も没倒少なからず。当時修理を事とせり。乱後の凋廢見るに忍びたり（「忍びざる？」ありさまなりし）」

『東航紀聞』は、善助や弥市の口述をありのままに記した上で、割注で参考書から得た知識を補う体裁をとっているが、上記の善助の感想の後に、つぎの割注がある。

乍浦集詠。烏程孫燮。壬寅秋乍浦感事詩曰。海浜経乱地。燐火出頽垣。貨散商難聚。民窮吏不尊。空張巢燕幕。

誰補^{ハシ}觸^シ抵^シ藩。生長承平日。偏驚垂老魂。干戈雖已息。世事益堪虞。善後軍儲急。營巢吾口瘡。一貧天下共。百廢眼前俱。肉食謀安^{シカ}出。憂^ハ深草^ノ儒。と乱後のさま想いやられたし。

ここではむしろ『乍浦集詠』（卷九四表）から得た知識がまず質問者の脳裡にある。そしてそれが善助の答えにも微妙に反映している様をうかがうことができる。

(三) 山本錫夫の書き抜き

最後にもう一つ、『乍浦集詠』とかかわった知識人をあげておく。京都派の本草学者として著名な山本亡羊の嗣子で自身も本草家であった山本錫夫（一八〇九―一八六四）の場合である。

錫夫、幼名は沈三郎、号は榕室。亡羊の三男であったが、兄二人は夭折したので実質的に嗣子として父の学問を継承した。本草を主とし、儒と医学とを従とするのが山本家の家学の伝統であるが、錫夫はよくこの学風を受け継いで広い関心をもつと同時に、写本につとめて自家の「読書室」と名付けた書齋の蔵書の拡充につとめた。

彼は本草家であるとともに、対外関係にも関心が深かった。本草学が自然百般に関心をもつ以上、それが世界関心となることは必然であったように思われるが、この点については別に論じたので、ここでは繰り返さない。彼の筆録した文献を検討すると、その対外関心の契機となったのは、他の知識人同様にアヘン戦争であつて、嘉永元年に『夷匪侵境録』を抄写したものが現存する。その後、彼は多くの漂流記を筆写してもいるのである。⁽²⁾

それらの写本とは別に錫夫が残した膨大な書抜き類が現存している。そのなかで『榕室叢抄』と題されたノート類五十六冊のうち第八冊中に『乍浦集詠』からの抜粋がある。

内容をみれば、和刻の抄本からではなく、『乍浦集詠』の原本によつてゐることは明らかであるが、一葉三十行の罫紙に細字で写された量は多く、ほぼ二百五十人におよぶ詩人の作が抜粋されている。ただし予想に反してアヘン戦争関係の詩はあまり多くない。むしろ全体として原本の半分近くを抜き出しているにもかかわらず、殉難詩は一つも出していないから、伊藤圭介や小野湖山とはいささか違った態度で『乍浦集詠』に接したことは明らかである。

彼の抜粋の基準はあまり判然としないが、全体に満遍なく目を通して巻一から順に気に入った詩を写していったように見える。気に入った佳句だけを抜粋したものもある。

おおまかな印象ではあるが、文人の鬱屈した思いを伝えるものが意外と多い。つぎに本草家らしく草木にかんする記述を含むものが目立つ。どちらかというとアヘン戦争に直接関係する詩というよりは、イギリスとの関係一般にたいする関心の方が強いように見受けられる。

またそれに劣らず、日本むけの貿易地としての乍浦との関係にも関心が注がれた。彼は別に前述の『東航紀聞』を見る機会もあり、乍浦記事などを抄写している。彼はまた『乍浦集詠』中の日本について言及した詩句は、ほとんど必ずといってよいほど抜粋にとめた。

要するに彼は必ずしも時事的には『乍浦集詠』を読まなかったが、ある種の日本を相対化する視点を得たかにみえる。これもまたひとつの『乍浦集詠』の受容の仕方といえようか。

おわりに

以上、さまざまな角度から『乍浦集詠』の日本における受容の諸相をみてきた。アヘン戦争の与えた危機感にある種の情緒的内実を与えたこの詩集の意味はなお、具体的な事例に則して解明されねばならないだろう。本稿は、その初歩的な試みにすぎない。

一九九二年夏に筆者は乍浦を訪れる機会を得た。ここでは十分に経験を反映することはできなかったが、現地で御世話くださった浙江省平湖県対外文化協会の皆さま、とりわけ乍浦在住の殷水根氏に感謝する。また上海図書館の蔵書の閲覧について懇切にご指導くださった上海社会科学院の湯志鈞先生に感謝の意を表したい。

註

- (1) 大庭脩「『乍浦集詠』乍浦へ還る」(『東方』一九九二年一月号)によれば、最近、南京図書館に収蔵されていることが判明したという。
- (2) 「弘化四歳 午四番船 同五番船 同六番船 同七番船 未壺番船 書籍元帳」／大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所 一九六七年)資料篇に鉛印されている。五一〇ページ。
- (3) 前掲書。資料篇五一六ページ、研究篇一九八ページ。
- (4) 前掲書。資料篇五三二ページ。
- (5) 内閣文庫に、この昌平坂学問所本(請求番号三五八／四三三)と楓山本(請求番号 集一〇六／一一)が架蔵されている。但し後者は巻二の第二葉を脱し、巻十六下外域の第一葉表に第二葉表が錯入(第一葉裏は正常だから刷違いといふべきだろうか)している。管見の範囲では別に東洋文庫に一本を蔵する。
- (6) 『江戸時代における唐船持渡書の研究』第五章「御役人様方御調書」等にかんする考察 一九九ページ／これはのち同氏の『江戸時代における中国文化受容の研究』(同朋舎 一九八一年)に再録された。第三章 漢籍輸入の研究 三九四ページ。
- (7) 『江戸時代の日中秘話』(東方書店一九八〇年)二四七―八ページ。
- (8) 『江戸時代における唐船持渡書の研究』一九八―九ページ。『江戸時代における中国文化受容の研究』 三九一ページ。
- (9) 貿易港としての乍浦については松浦章「乍浦の日本商問屋について」／『日本歴史』三〇五号(一九七三年十月)
- (10) 田辺八右衛門茂啓『長崎実録大成』は『長崎叢書』第一集第二卷所収(長崎文献社 一九七三年)。該当箇所は二九五ページ。なお同書の第十卷「海路更数並古今唐国渡り湊之節」には、「当代ハ上海、乍浦ニ処使用宜シキ所ナリトテ諸唐船往來共に此処ニ集テ互ニ交易ヲ成セリ」とある。本書の成立は明和四年。
- (11) 『光緒平湖県志』卷五武備「英夷之變」。
- (12) W. D. Bernard: Narrative of the voyages and Services of the Nemesis from 1840 to 1843(2 vols, London, 1844), vol. 2, p. 331.

- (13) これらの地方志、竹枝詩は『乾隆乍浦志』と『乍浦九山補志』が天理図書館に収められている（後者は東洋文庫にもある）他は日本国内には所蔵されていない。上海図書館の蔵書を参照した。
- (14) 伊藤の伝記にかんしては杉本勲『伊藤圭介』（吉川弘文館 人物叢書 一九六五年）とくに『乍川紀事詩』にかんしては同新装版（一九八八年）一八一ページ以下。なお拙稿「本草家と対外関心——岩瀬文庫の山本読書室本について」／『知多半島の歴史と現在』四号（日本福祉大学知多半島総合研究所 一九九二年）を参照。
- (15) 拙稿「唐風説書の一史料」／『調布日本文化』二号（調布学園女子短期大学 一九九一年）
- (16) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』一九七〇八ページ／『江戸時代における中国文化受容の研究』三九一—四ページに町奉行所関係書類が掲げている。
- (17) 後に述べる愛知県西尾市図書館内、岩瀬文庫蔵の山本錫夫写本に嘉永元年写とした『夷匪犯境録』写本がある。
- (18) 『和刻本明清資料集』（同朋舎 一九七四年）の（一）に中山久四郎旧蔵の木刻本の影印が、（二）に同じく写本の影印が収められている。
- (19) 嶺田の伝記資料は明石吉五郎『嶺田楓江』（千葉弥次馬発行 千葉 一九一九年）なお木更津の八剣八幡宮境内に楓江の寿碑が現存する。篆額を英文で記した珍しい碑である。前掲書および五弓豊太郎編『事実文篇』第四（国書刊行会 一九一一年）所載の碑文とは少異がある。なお彼の筆禍については宮武外骨『筆禍史』（改訂増補版 朝香屋書房 一九一六年）一五〇ページに關係史料を収める。『筆禍史』は刊年不明の崙書房影印本によった。
- (20) 『東航紀聞』は天下の孤本で国会図書館蔵。『日本庶民生活史料集成』第五卷 漂流（三一書房 一九六八年）に鉛印で収める。
- (21) 山本錫夫とその写本については拙稿「本草家の対外関心」／『知多半島の歴史と現在』四号（一九九二年）を参照。